

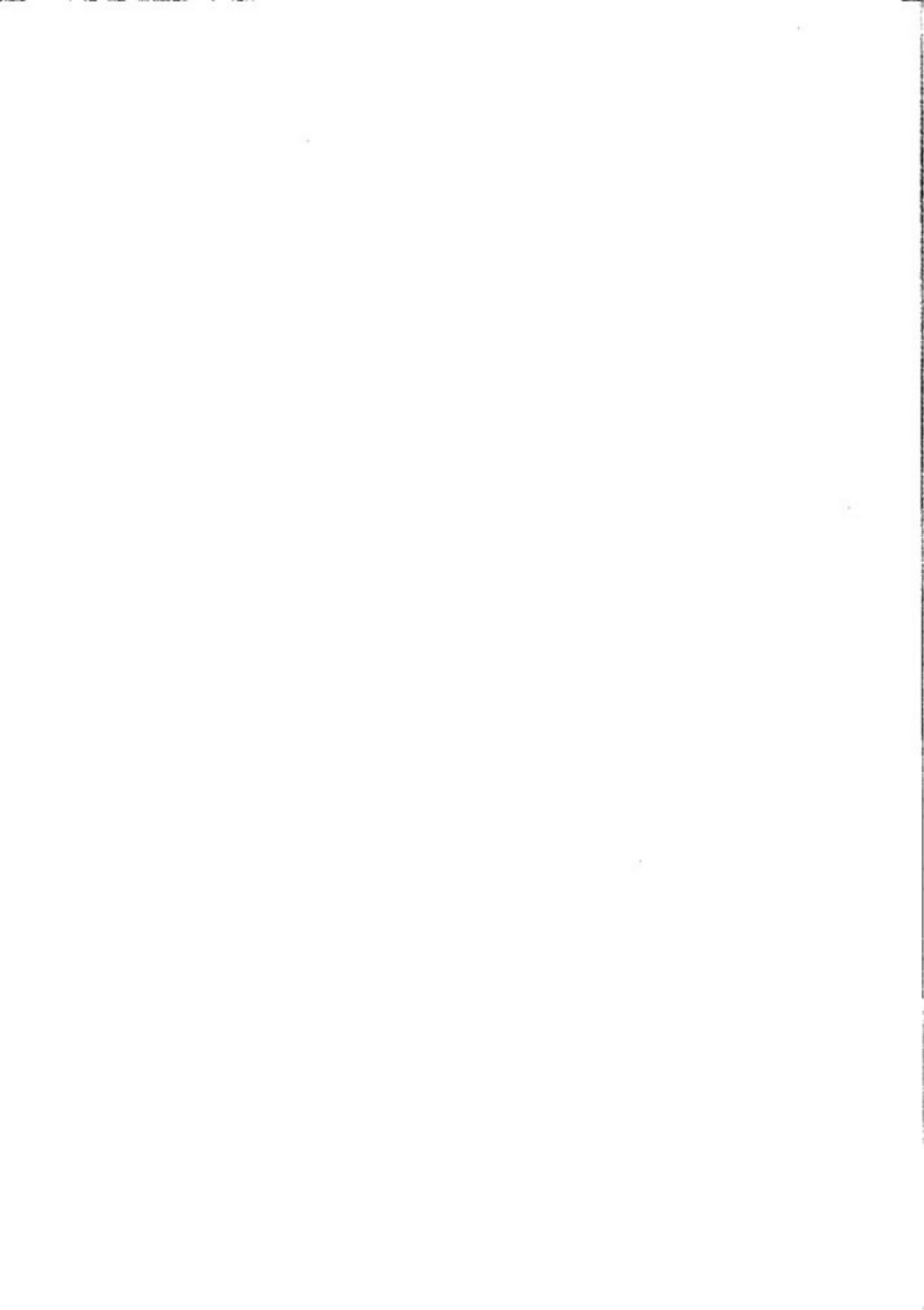
八尾市文化財調査報告書
昭和57年度国庫補助事業

八尾市内遺跡昭和57年度発掘調査報告書

— 教興寺の調査 —

1983. 3

八尾市教育委員会



はじめに

八尾市内には数多くの遺跡があります。その実態については、資料が不足している為、いまだに解明されておりません。しかし近年の土木工事に伴う大規模な発掘調査は、めざましい成果をあげており、あらためて埋蔵文化財の重要性を認識させられる次第であります。今年度八尾市教育委員会で実施しました発掘調査は、小規模なものばかりでありますか、これらの基礎資料を積み重ねることによって、重要な遺跡の保存をはかり、さらに新たな学術的成果へつながっていくものと信じております。今後とも引きつづき、文化財保存に対し御協力と御支援を賜りますよう、お願いする所であります。末筆ながら今年度の調査に御協力を頂きました多くの方々に、深く感謝申し上げます。

昭和58年3月31日

八尾市教育委員会

教育長 坂本正一

例　　言

1. 本書は、八尾市教育委員会が、昭和57年度国庫補助事業として実施した、八尾市内遺跡昭和57年度発掘調査報告書である。
2. 調査は、八尾市教育委員会文化財室、山本昭・米田敏幸が担当し、実施したものである。
3. 調査を施行した遺跡・場所・期間については本文別表のとおりである。
4. 調査・整理に際しては、駒沢敦・橋本郁也・佐藤義明・松島仁・南条秀成・大阪経済法科大学考古学研究会他諸氏の参加を得た。
5. 教興寺跡の発掘調査には、大阪経済法科人文学村川行弘教授に格別な御助力を頂いた。
6. 本書の執筆は、参加者各自があたり、米田敏幸が編集を行った。
7. 調査記録には、実測図・写真の他、カラースライドを作成した。広く利用されることを望む。

目　　次

教興寺発掘調査概要報告書	1
昭和57年度埋蔵文化財発掘調査実施概要	14
文化財保護法98条の2に基づく埋蔵文化財緊急発掘調査及び試掘調査表	16

教興寺跡発掘調査概要報告書

1. 調査経過

八尾市の東部に位置する高安山麓の地域は、南北に継走する東高野街道を中心として、古代より交通の要路として栄えた所である。したがって高安山麓の扇状地には、古代から中世にまたがる数多くの遺跡や名勝が存在する。この地域は、近年、大都市近郊におよせる開発の波の中で、かろうじて市街化から免れ、現在も昔ながらの景観をとどめている。しかし最近の小規模な開発により、この地域が市街化されてゆくのも時間の問題であろうと思われる。この山麓地域に存在する多くの遺跡は、発掘調査等を実施する機会も少ない為、遺跡の範囲や存在状況を確定する資料が不充分である。さて八尾市教興寺には、付近に奈良時代から平安時代の古瓦の出土が知られている以外、充分な考古学的資料を欠いている。昭和57年度には、当地より南200mの垣内540番地で行われた開発工事において、古墳時代の土器包含層の露頭を確認した他、東西300mの黒谷785番地でも個人住宅の立会調査で、古墳時代後期の遺構を確認している。

昭和57年4月、教興寺409番地¹ 氏より教興寺山門脇に居宅を建築したい旨の連絡を受けた。折しも昭和57年9月と昭和58年2月に八尾市水道局が、教興寺周辺において、水管の埋設工事を行う旨の通知があった。このような状況の下で、教興寺の寺院遺構の有無と郡川遺跡の範囲確認を兼ねて教興寺406における発掘調査の実施を計画した。調査に際しては、同寺住職松井雅彦氏の快諾を得て、昭和58年2月9日より2月21日までの間、同境内の5ヶ所においてトレチ調査を実施した。調査にあたっては、経済法科大学考古学研究会の全面的な協力を得た。また調査費用は、昭和57年度緊急発掘調査国庫補助金の一部を使用した。

2. 地理的環境と歴史

教興寺は大阪府八尾市教興寺に所在し、近鉄大阪線高安駅東約1kmの地点にある。この地域は、標高642mの生駒山を最高峰とする生駒山地西麓で、特に標高488mの高安山を後背とする地域にあたる為に、高安山麓とも呼ばれている。この生駒山地西麓は、断層山地特有の急斜面をなし、多くの渓谷が発達し、開拓扇状地が標高100m以下15m前後までの地域に形成されている。教興寺は、このような開拓扇状地の扇端に近い標高25m前後に立地している。

生駒山地西麓は、古代より開けた地域で教興寺の北には水越・大竹・郡川遺跡があり、南には想智遺跡がある。ともに弥生時代から古墳時代に至る遺跡である。また、西には弥生時代より鎌倉時代に至る集落遺跡である中山遺跡がある。さらに、後背する高安山には近年市民グル



1図 調査位置図 1:5000

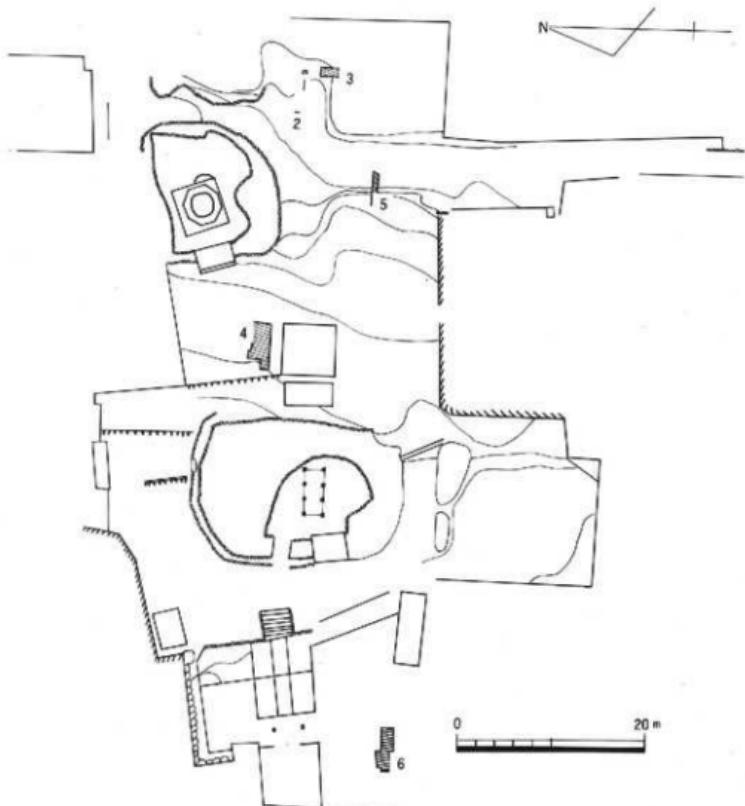
一帯によって発見された高安城がある。このような地域に立地する教興寺も、創建は古代に遡ると言われている。寺伝によると、聖徳太子の発願によって秦河勝が建立し、仏教を興隆するという意味で教興寺と名付けたとされている。文永6年(1269)叡尊が泉福寺から西大寺へ帰る途中、秦河勝建立の当寺が荒廃しているのを見て再建を発願し、弘安3年(1280)には、銅鐘が出来上がった。これより先、文永11年(1274)の文永の役、いわゆる元寇に對して、時の鎌倉幕府は全国の武士に出陣を命じた。これとともに朝廷も、全国の寺社に蒙古降伏の祈願を命じた。叡尊も勅命を受けて四天王寺と教興寺と男山八幡宮の3ヶ所で、蒙古降伏の大祈願を行ったと伝えられている。その後、暦応2年(1339)足利幕府は、全国に安国寺と利生塔を設けて利生安國を祈願した。この時、加美(大阪市平野区)正覚寺を河内国の安国寺とし、教興寺に利生塔を建立したと思われる。以上のように教興寺は、13世紀から14世紀にかけては相当の繁栄を保っていたようであるが、戦国時代に入って永禄5年(1562)教興寺に陣取っていた河内守護畠山高政と、三好義興・松永久秀の大軍が戦乱を繰り広げた。この戦乱で教興寺の堂宇は、兵火にかかり焼失したようで、再び荒廃にまかされることになった。延宝5年(1677)になって、高野山の淨觀院和尚の発願で、本堂・祖師堂・鐘楼が再建され復興したが、明治18年(1885)の暴風雨によって堂宇のほとんどが倒壊し、後には舊寺と呼ばれる程さびれた。現在は、仮本堂・鐘楼・庫裡その他の建物がある。真言律宗西大寺の末寺で、獅子吼山大慈三昧院教興寺と号している。また、周辺には寺池・重頭池と呼ばれる寺院関係の名を冠した池や、大門・忍淨坊等の小字名が伝えられている。

(駒澤)

(注1) 教興寺文書「御手印縁起」(『八尾市史』史料編 1959年刊)

(注2) 教興寺文書「教興寺鐘銘」(『八尾市史』史料編 1959年刊)

(注3) 教興寺文書「異国襲来祈禱注錄」(『八尾市史』史料編 1959年刊)



2 図 教興寺境内トレンチ配置図

3. 調査の概要

第1・第2トレンチ

教興寺境内のうち、東側の平坦地に、間隔を4mあけ、50×50cmの大きさで第1・第2トレンチを設定した。

層序は、第1層として黒色粘質土層が、第1トレンチのみ存在し、第2層以下両トレンチは、同様の層位を示している。第2層・灰黄色砂層、第3層・淡茶褐色砂層、第4層・明茶褐色砂層、第5層・黄褐色砂層、第6層・暗茶褐色砂層の順で構成されている。

出土遺物は、第1トレンチ・第1層から、江戸時代以降の瓦数10点と陶質の燭台が出土した。第5層からは、室町～江戸時代の陶器片2点、土師器片2点が出土しているが、時代にへだたりがあるものについては、二次堆積ではないかと考えられる。第6層から、土師器の小片が出土している。この土層に、若干の炭灰が混入しており、これは焼土と考えられ、永禄5年(1562)年の戦火の痕跡であろうと推測される。第2トレンチについては、特筆すべきものは検出されず、わずかに第4層から土師器片、第5層から須恵器片、第6層から土師器片が各1点ずつ出土したにとどまる。遺物の出土状況は、いずれも二次堆積であると思われ、時期を明確に判断する資料には至らない。

尚、当初の目的である寺院遺構の有無は、確認できなかった。

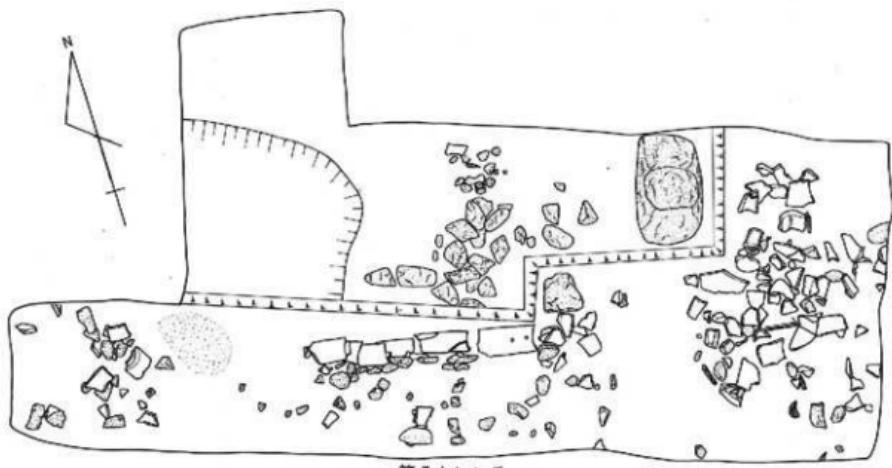
(佐藤)

第3トレンチ

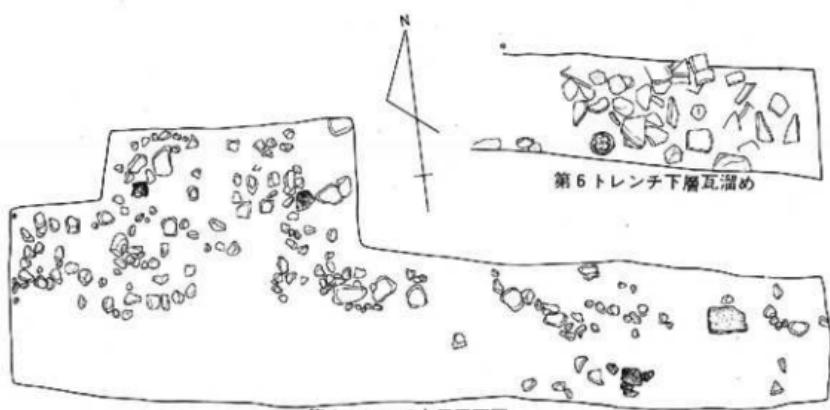
第1トレンチの南、約2.5mの所に2×1mのトレンチを設定した。この第3トレンチは、第1・第2トレンチにおける包含層の確認に基づき、位置を決定した。

層序は、基本的に第1・第2トレンチと共に、第1層の黒色粘質土(表土)及び第5層の茶褐色砂質土層は消滅していた。第2・第3層は、江戸時代の盛土でいずれも約30cmの厚さを測り、両層の遺物として、江戸時代以降の瓦が多量に出土した。第4層の明茶褐色砂質土層からは、江戸時代以降の瓦とともに土師器片・須恵器片・鉄釘が数点出土した。また、第6層の暗茶褐色砂質土層は、厚さ約15～20cmでトレンチ両側では消滅する。この土層は瓦器・土師質皿・須恵器の小片や鉄製品が出土する室町時代の包含層であり、永禄5年の戦火の痕跡と思われることは前述した。

包含層の下、第7層の灰色砂質土層から鎌倉～室町時代の土師・須恵器等が出土し、また、第8層の暗灰色砂質土層から6世紀頃の須恵器、第9層の黒灰色砂質土層では、土師器の甕・口縁(5図11)と、それぞれ古墳時代の遺物が出土した。以上の結果として、第3トレンチでは、古墳時代から室町・江戸時代にわたる層位関係を不充分ながら把握できたが、教興寺創建期に

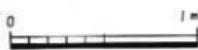


第7トレンチ



第6トレンチ上層平面図

3図 トレンチ平面図



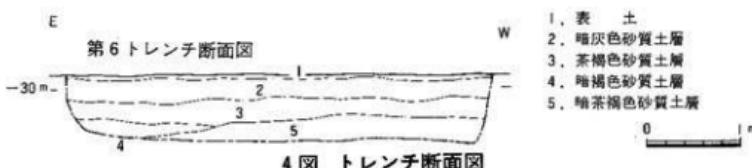
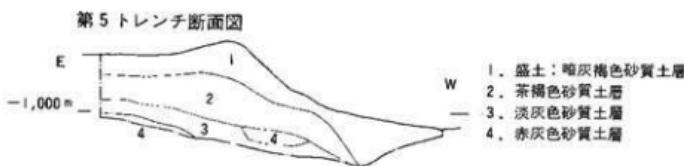
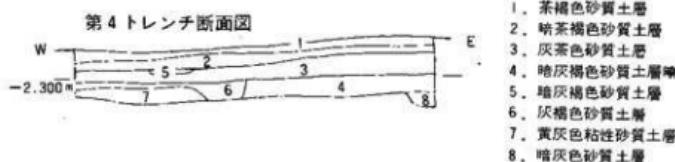
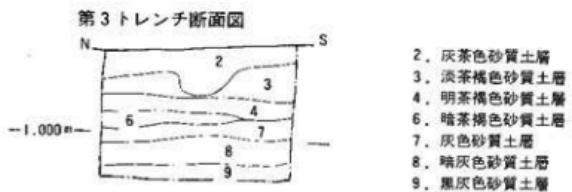
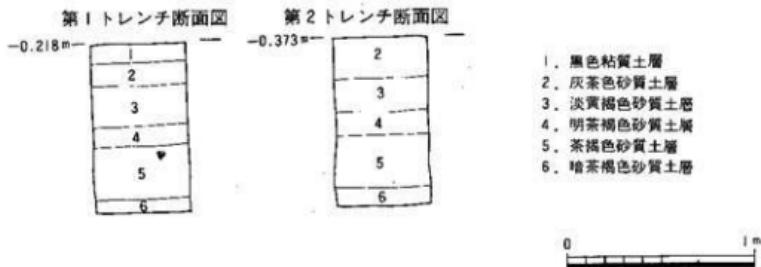
あたる土層は認められなかった。

第4トレンチ

現在の鐘楼の北横に $4 \times 2\text{ m}$ のトレンチを設定した。調査の過程で遺構確認の必要上、トレンチ西と北西の2ヶ所にそれぞれ1m以内の拡張区を設けた。この第4トレンチは、境内中央に位置し、調査開始当初、創建期の遺構が存在する可能性を考えて設定した。

第4トレンチは、1~3の各トレンチと比較して約1.5m低所にある為、その層序及び土層の性格は、他のトレンチと異なる。第1層は表土で、厚さ10cm程度の無遺物層である。また、第2層の暗茶褐色砂質土層は、江戸時代の盛土で約15cmの厚さを測り、土層中から軒丸瓦を含む江戸時代以降の瓦が多量に出土した。第3層は灰茶色砂質土層であるが、北断面に一部、ブロック状をなす暗灰褐色土の混入が認められ、これを第5層として区別した。第3層からは、江戸時代の瓦が夥びたやすく出土し、トレンチ東では、瓦溜めの存在を確認し、多数の平瓦・丸瓦・鬼瓦(6図18)の他、鉄釘1点が出土した。しかし、この瓦溜めの範囲は、調査区に制約がある為、確認できなかった。同層トレンチ中央では、玉縁部を東に向け、重なりあいながら一列に並ぶ6点の丸瓦を検出した。この瓦列遺構は、人為的に置かれたもので、瓦を安定させる為に、丸瓦の南側面に直径10cm程度の小石が列状に配置されていた。尚、用いられた丸瓦は、瓦溜めから出土した瓦と時期的差はないものと思われるが、ただ1点、室町時代のものとみられる丸瓦(6図14)が含まれていた。これは、淡黄褐色に焼けた比較的厚手のもので2つの釘穴を持つ。おそらく室町時代に使われた瓦を、江戸時代に再使用したものであろう。瓦列の両側と北側では10~15cmの落差がみられ、南側が高く、瓦列をはさんで段を形成していた。このことから、瓦列遺構は基壇として用いられた可能性もあるが、正確な位置目的は断定し難い。尚、同層トレンチ西側は、瓦の量が比較的小ないが、約40cm四方の範囲で、鮮明な赤褐色を帯びる焼土を確認した。さらに、西端のトレンチ拡張区からは、小砾と共に存する瓦片が数点出土した。また、この土層中、出土した瓦は、現在の鐘楼に使用されている元禄時代のものと酷似する。第3層では屋瓦類の他、瓦列遺構の南東から寛永通宝(5図9)が出土し、また土師器の小片が、少量散布していた。

第4層の調査は、第3層下面の遺構を保存する為、トレンチの東西を半分に割り、東西4m、南北1mに区画して実施した。同層は暗灰褐色砂質土を主体とするが、北側断面においてトレンチ中央から西にかけては、暗灰褐色砂質土が消滅し、代わって灰褐色砂質土層(第6層)・黄灰色粘性砂質土層(第7層)の堆積がみられた。第7層は比較的締まった土層で、北西拡張区にて面的におさえることができたが、遺構・遺物の検出はなかった。ほぼ同じ高さで第4・6・7の3つの層が共存するが、以下第4層として統一する。第4層で検出した遺構として、礫數群があ



4 図 レンチ断面図

げられる。この礫敷は第3層の遺構面より20~30cm下層に存在し、トレンチ中央に集中した形で確認した。出土した礫の大半は直径20cm前後である。礫敷は軒丸瓦片(5図4)を含む少量の瓦を作り、軒丸瓦の瓦当面から室町時代のものと推定できる。また、礫敷の東からは、南北約60cm・東西約30cmの幅長を持つ礫石が認められた。礫石は極めて平坦な面を呈し、検出面で厚さ約10cmを測る。おそらく室町時代に置かれたものと思われる。尚、トレンチ西側は第3層からの擾乱により礫敷の検出はなかった。この擾乱の中から、夥びただしい数の礫に混じり、多量の瓦(鎌倉~室町時代?)及び土器片、古墳時代の須恵器坏(5図12)が出土した。この擾乱は境内の中央に位置し、室町時代に池として存在したものと思われるが、その範囲は調査区に制約がある為、確認できない。トレンチ東端で、第4層下の暗灰色砂質土層まで掘り下げたが、顯著な遺構は認められなかった為、ここで調査を打ちきった。

第4トレンチの調査の結果、第3層から江戸時代の瓦溜め及び瓦列遺構が存在すること、また、第4層では室町時代頃と推定される礫石の検出と池状遺構の確認等、各々の成果を得た。

しかし、同トレンチの調査では、第4層の下層における層序及び遺構の有無の確認には至らず、今後の調査にてさらに検討が必要である。

(橋本)

第5トレンチ

第1~第3トレンチの位置より10m南に距離をおき、日本堂跡付近に幅0.5m・長さ7mのトレンチを設定した。

層序については、第1・第2層は盛土で、遺物はみられない。第3層・淡灰色砂質土層から出土した遺物は、江戸時代以降の瓦がほとんどであるがわずかに室町時代の瓦と思われるものもある。他に鉄釘が2点(5図10)出土している。第4層・赤灰色砂質土層の上面では、江戸時代以降の瓦溜めを盛土より62cm掘り下げた地層から検出したが、その範囲はトレンチ内において確認できなかった。

寺史より推定すれば、この瓦溜めは延宝5年(1677)淨嚴院彦和尚によって再建された本堂が、明治18年(1885)の台風の被害により倒壊した後、埋もれたままの状態になっていたものであろう。第4トレンチで発掘された瓦溜めと同様な規模をもつものと考えられ、今後の検討が必要であろう。その他の遺構は確認できなかった。

(佐藤)

第6トレンチ

現在の教興寺山門脇の住宅建設予定地に1×4.5mの、東西に長いトレンチを設定した。ここは、現在の境内のうちで最も低い所に位置する平坦地であるが、境内西側の市道よりも1.5mの石垣によって高くなっている。この調査は、住宅建築時に実施したものであるが、かりに

第6トレンチとしておく。

層序は、第1層・暗灰色砂質土、第2層・茶褐色砂質土、第3層・暗褐色砂質土である。

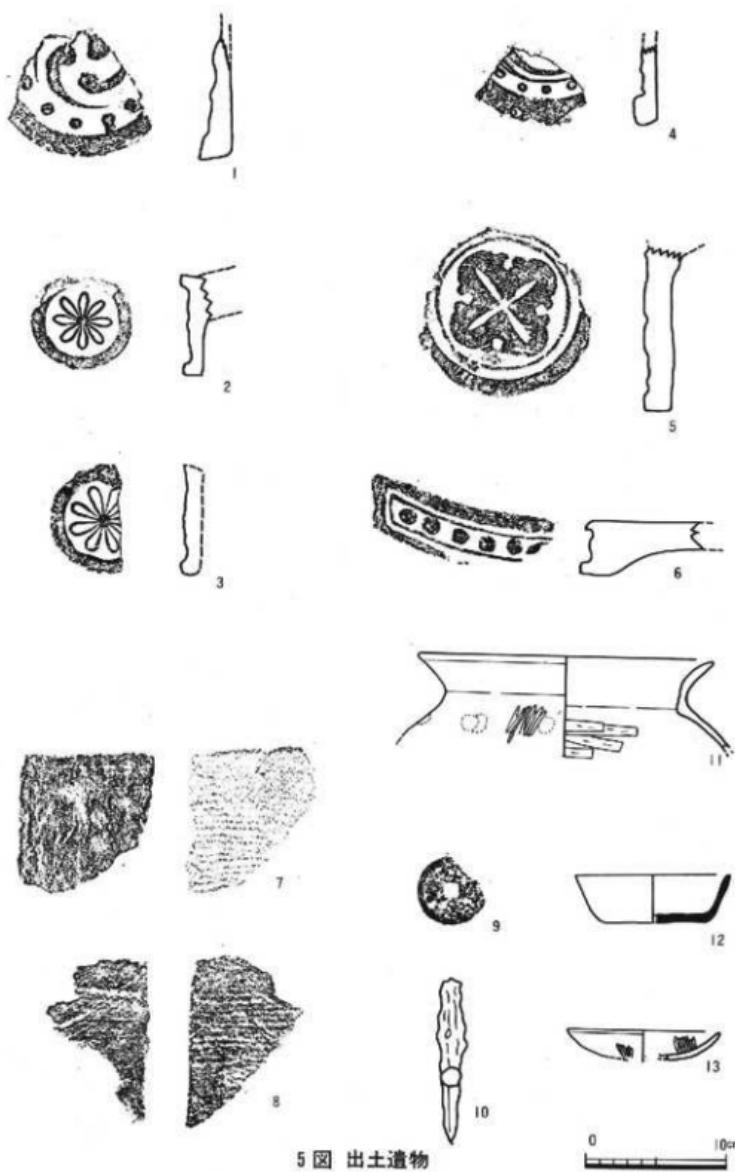
調査の結果、第3層をベースとしたGL-40cmの所で礫敷遺構、さらに第3層を掘り下げたGL-60cmで瓦溜めを検出した。

礫敷遺構は、径10cm程度のこぶし大の礫を敷き並べたもので、トレンチ中央を東西方向に礫列が走っており、その北側が礫敷となっている。この遺構上面に被る第2層中より、室町～江戸時代の瓦や、近世磁器が含まれていることから、江戸時代をこの遺構の下限と考えることができる。瓦溜めは、礫敷遺構のベースとなっている第3層を掘り下げた面で検出した。この瓦溜めは、トレンチ東側を中心に集積する。この中には、近世に下る瓦は含まれておらず、いずれも平安～鎌倉時代のもので、風化・摩滅は受けていない。瓦当が2点出土している。宝相華文軒丸瓦(6図5)と連珠文軒丸瓦で上記時代が考えられ、他の平瓦・丸瓦とも内時代のものであろう。

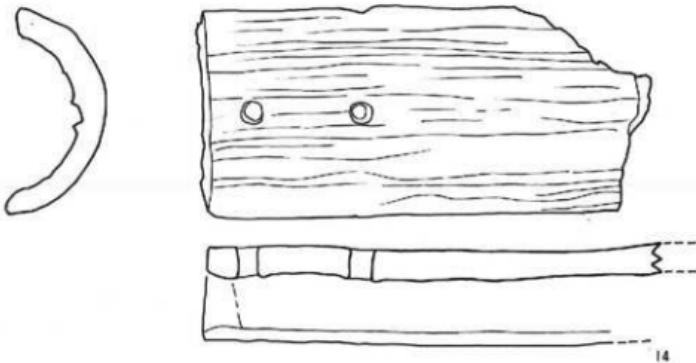
4. 出土遺物 (5・6図)

(1～3)は近世の軒丸瓦である。(1)の内では右巻き三つ巴で、巴の頭部は丸く、太短かい尾を持つ。外区は大粒の珠文がめぐる。(2～3)は八葉の菊花文を持つ。瓦当径が7cmと小ぶりである。(4)は室町時代の軒丸瓦である。内区は右巴で長い尾を持ち、尾の先端は、外区を画する圓線に接する。外区は小粒の珠文を配する。(5)は平安あるいは鎌倉時代の軒丸瓦である。四葉の宝相華文をモティーフとしており、中央には十字に鍋が刻んである。外区には圓線がめぐり、瓦当面全体に板目がみられる。(6)は鎌倉時代頃と思われる軒平瓦で、内区に大粒の連珠を配し、外区は圓線がとりまく。断面は曲線彎を呈し、凹面は細かい布目、凸面はヘラナデである。(7・8)は平瓦の拓影で、凹面に粗い布目、凸面に粗い繩叩きをもち、平安時代のものかと思われる。(11)は土師器蓋の口縁で、古墳時代後期のものである。(12)は須恵器环身で、7世紀代の年代が考えられる。(11・12)とも寺院遺構とは直接関係なく、北方に所在する郡川遺跡との関連が考えられる。(9・10・13)は江戸時代の遺物である。(9)は「寛永通宝」。(10)は瓦止めの釘であろう。(13)は土師質の灯明皿である。(14)は大振りの丸瓦で赤褐色に変色している。釘穴が先端部寄りに2ヶ所あいている。外面はヘラナデ、内面に細かい布目がみられ、室町時代以前の年代が考えられる。(15・16)は近世の丸瓦で、現存の建物に使用されているものとほぼ同大である。外面はヘラナデ、内面に細かい布目を有し、短かい玉縁がみられる。(17)は近世の棟込瓦であろう。(18)は鬼瓦で時代は不詳である。

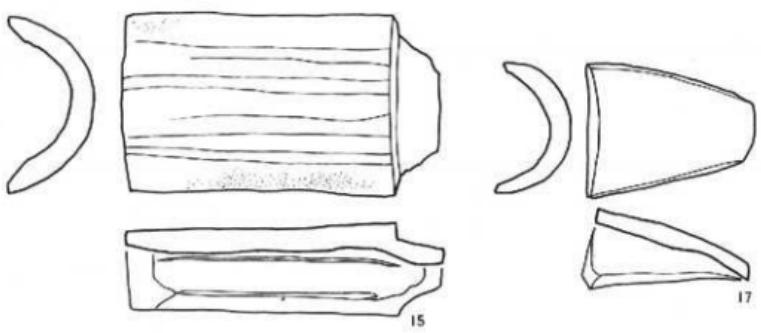
(米田)



5図 出土遺物

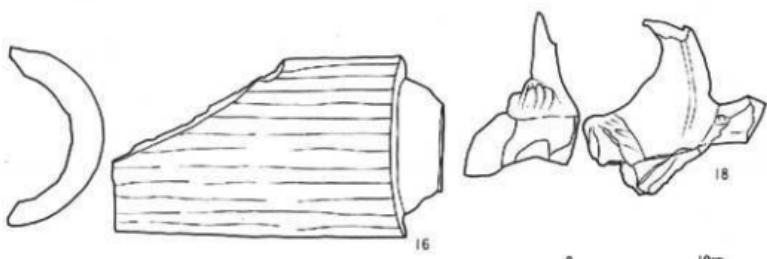


14



15

17



16

18

0 10cm

6図 出土遺物

総 括

教興寺の周辺は、「旧事本紀」「天神本紀」に「スコロハシヒタニト、アメニカツルム」と記されている。物部氏の祖神降臨伝承の候補地説もある地域である。

文明8年(1470)の教興寺「御手印縁起」によると、聖徳太子が物部守屋を討滅した際、秦川勝に命じて高安の地に教興寺を建立させたとされている。秦寺とか高安寺と呼ばれるのも、この由緒によっている。

中世になって西大寺の叡尊が文永6年(1269)に参詣し、その荒廃を悲しみ、淨財の寄進を得て堂塔の再建をおこなっている。元寇の際には叡尊との関係で、当寺で蒙古降伏の大祈願がおこなわれている。

南北朝の争乱では、足利尊氏の部将細川頼氏・六角氏頼が楠木正行と教興寺合戦をやっている。また、暦応2年(1339)には足利尊氏が各國ごとに安国寺・利生塔を設けているが、河内国の利生塔は教興寺に設けられたと伝えられている。永禄5年(1562)には河内守護畠山高政が当寺を陣所とし、三好義興・松永久秀の軍と戦って敗れている。この戦火で堂塔は焼失し荒廃したらしい。

近世になって淨業院和尚によって本堂・祖師堂・鐘楼が再興(延宝5年と伝う)されたが、明治18年の大暴風雨で本堂・祖師堂などが倒壊し、客殿が仮本堂となって現在に至っている。

かつては広大な寺域をもっていたらしく、近辺に大通寺・梅岩寺・意滿寺・薬師堂があり、近代までは半胸寺・松林寺・煙田庵が遺存し、さらに重塔・大門池・龍燈田・本淨坊・忍淨坊・寺池などの字名がみられる。

以上が教興寺についての所伝と記録の概要である。

したがって、調査はこれらの所伝や記録の痕跡を確認し、創建年代の裏付けや歴史的変遷の過程をあきらかにする目的とした。

第1トレントでは土層堆積の層序は整然としていたが、寺院の歴史をあきらかにする資料は検出できず、わずかに永禄5年の戦火痕を推測する焼土が検出された。

第2トレントでは地山層は古墳時代までさかのばる遺物を散布することが知られたが、寺跡遺構は検出できなかった。

第3トレントでは近世の整地跡がみられ、また室町時代の戦火痕もみられた。さらに層序は鎌倉期・占墳時代後期の包含層の遺存を示していたが、教興寺創建期の上層は認められなかつた。

第4トレントは他の地区と土層及び層序を異にしていた。このトレントでは、江戸時代の瓦

溜め・瓦列造構及び室町時代の礎石と池状遺構を検出した。遺物には古墳時代の須恵器・土師器片や鎌倉時代～室町時代の瓦片さらに近世の瓦がある。

第5トレンチでは近世に再建された本堂の倒壊痕跡が推測された。

第6トレンチでは礎敷造構と瓦溜めが検出されている。この瓦溜めには、平安時代から鎌倉時代に至る遺瓦が包含されていた。

以上の予察調査結果よりみて、延宝5年(1677)頃に再建された寺院が明治18年の大暴風雨で倒壊した事実、また永禄5年の兵火で寺院が焼失した事実などが記録を裏付けることになった。

遺物から觀尊の再興は認められるが、それ以前は平安時代の遺瓦を検出するのみである。

したがって現在の知見では、古墳時代後期には、ごく近辺にその遺跡があり、平安時代には寺院が存在し、鎌倉時代以後は現在までの歴史的経緯をあきらかにすることが可能となったということになる。

限られた境内地域のトレンチ調査である為、創建期の遺構や遺物の追求は今後の検討課題となつた。

調査に関しては補助員として参加した本学考古学研究会の学生達を連日懇切に指導して下さった八尾市教育委員会文化財室の方々に感謝の意を表したい。

(大阪経済法科大学教授 村川行弘)

昭和57年度埋蔵文化財緊急発掘調査実施概要

1 調査の概要

八尾市教育委員会では、文化財保護法98条の2項にもとづき、八尾市内に所在する69遺跡に対し埋蔵文化財の有無の確認と保存の為の基礎資料を作成する為、年間200件にものぼる発掘・立会調査を実施している。これらの調査のはほとんどは、遺跡内及びその周辺で計画される土木・建築工事に伴うものである。その内容は10000m²を越えるような大規模な開発から、わずか数平方メートルの建築工事に至るまで多岐に及んでいる。これらの工事によって埋蔵文化財が破壊されることのないように、八尾市教育委員会文化財室では事前に発掘調査または工事立会を実施し、文化財保護の為に必要な事項を指導している。その内容には慎重工事・計画変更・記録保存等があり、そこに埋蔵されている文化財の状況により個別に対応を行っている。昭和57年7月1日より(財)八尾市文化財調査研究会の発足により、記録保存等にかかる学術的発掘調査は、同研究会が実施することになった。その為、八尾市教育委員会では、行政判断の為に必要な発掘調査と立会調査に国庫補助金の一部を使用し、事業者の協力を得て実施することとした。

2. 調査の成果

昭和57年度に実施した小規模発掘調査は一覧表のとおりである。八尾南遺跡では、同遺跡の南側に位置する若林町周辺で、古墳時代の遺物包含層の検出が相次いだ。このことは、同遺跡内における集落遺構の分布状況を知る上できわめて有力な手掛りである。また、同遺跡の東側である木の本733番地にも須恵器・土師器片を検出している為、さらに東側への広がりが予想できる。

恩智遺跡では、同遺跡の中心部と考えられる恩智中町2丁目付近で、個人住宅の建築及び水道管の埋設に伴い立会調査を実施した。いずれにおいても弥生時代前・中期の遺物包含層が存在したが、恩智中町2丁目265番地では、弥生時代前期の土壌状の遺構を確認した。この遺構は深さ75cmのもので、底より平行沈線を持つ壺形土器(7図21)が出土している。

水越遺跡では、千塚169他において、工事立会中、遺物包含層が露頭するという不幸な事態に至った。とり急ぎ露頭部分において部分調査を実施したところ、弥生時代中期の甕(8図23)を埋置した土塙を検出した。これは、甕棺として埋められている可能性が考えられ、わずかでも調査記録をとることができた。

中田遺跡においては、中田1丁目、中田4丁目、八尾木北2丁目、八尾木北5丁目等の各所において古墳時代から中世に至る遺物包含層を検出している。しかし、当遺跡においては、い

すれも点的な調査に終始している現状である。

跡部遺跡では、古墳時代前期の遺物包含層が、かなり西にまで及んでいることがあきらかとなり、亀井遺跡や久宝寺遺跡などを含め、低平地における一連の遺物群として扱えることができるであろう。

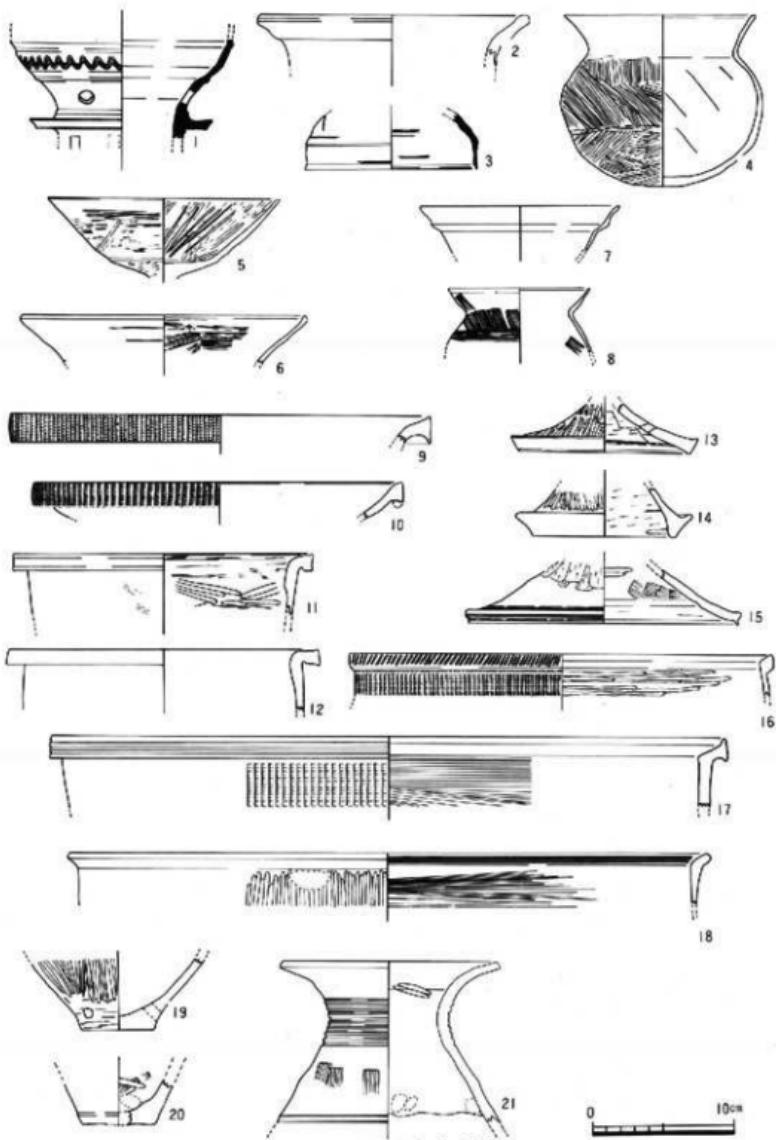
亀井遺跡では、亀井町4丁目34番地の個人住宅基礎工事に立会したところ、掘削断面に建物礎石と思われる石材が露頭していた為、部分的な調査を行った。その結果、室町時代後期頃と思われる土塙を検出し、瓦質羽釜・すり鉢・軒平瓦等(9図)の遺物が多数出土した。これらは、中世の真觀寺との関連が考えられる。

木の本遺跡は、昭和56年3月に発見された新たな遺跡であるが、その後確認されなかった平安時代の遺物群(10図45~52)が木の本1丁目3-1番地から出土し、同時代の集落遺跡として位置づけられるようになった。当地点の東南方には、平安時代の条里制が、地下に良好な状況で遺存していることがあきらかとなっており、これらとも関連して、この付近の歴史像を復元する為の貴重な手懸りである。

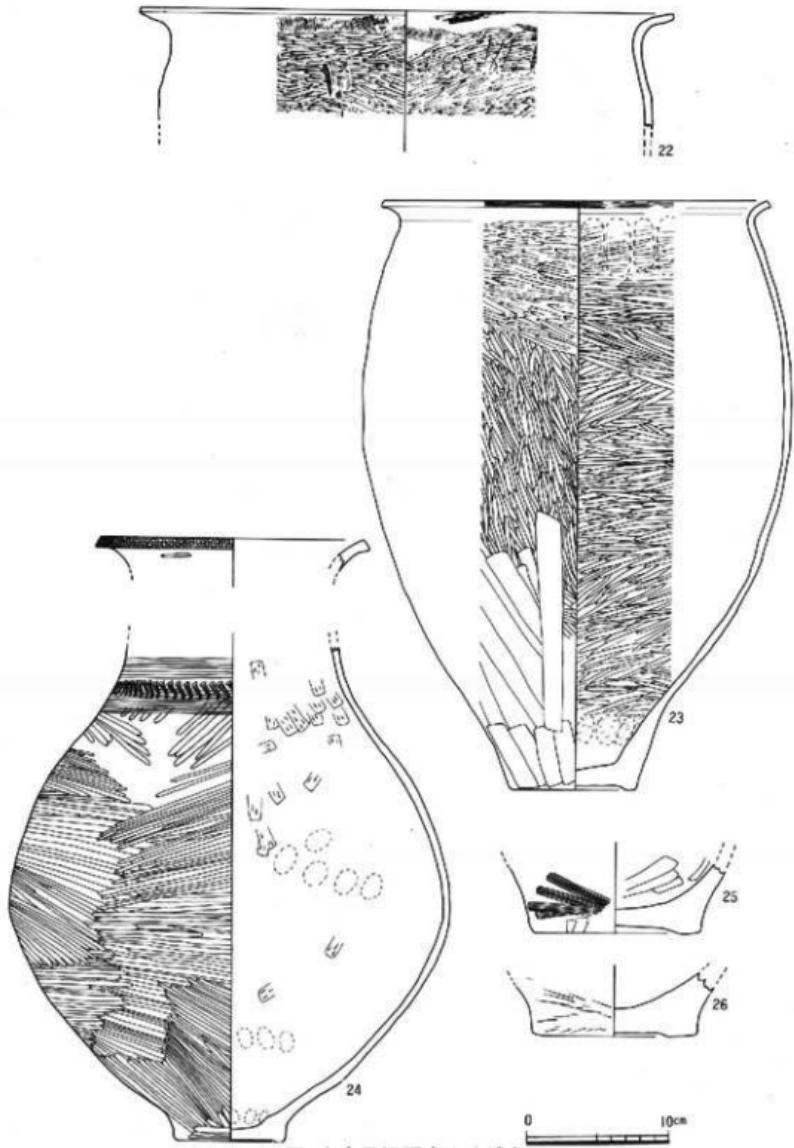
久宝寺寺内町では、多數の近世磁器が出土する(10図54)が、顕証寺周辺の久宝寺4丁目付近の地下には厚い焼土層の存在を確認した。この層の中からは、多數の瓦片とともに室町時代の土師器皿(10図53)が出土している。このことは、当寺内町の歴史を考える上で興味深い。

以上のように、市内の小規模調査を実施することにより、断片的であるが各遺跡の存在状況や時代・範囲といったものがある程度まで把握できるようになった。しかしこれらは、遺跡保存の為の基礎資料であり、学術調査による成果ではない。これらの遺跡は、今後、何らかの形で学術調査を経なければ、その内容や歴史的意義も把握されずに破壊あるいは地下に埋もれてしまうことであろう。緊急の課題は、早期のうちに抜本的な保存処置を構じることであろう。事実、上記の発掘調査により遺跡の範囲は大きく変わっている為、文化財分布地図の修正が必要になってきている。

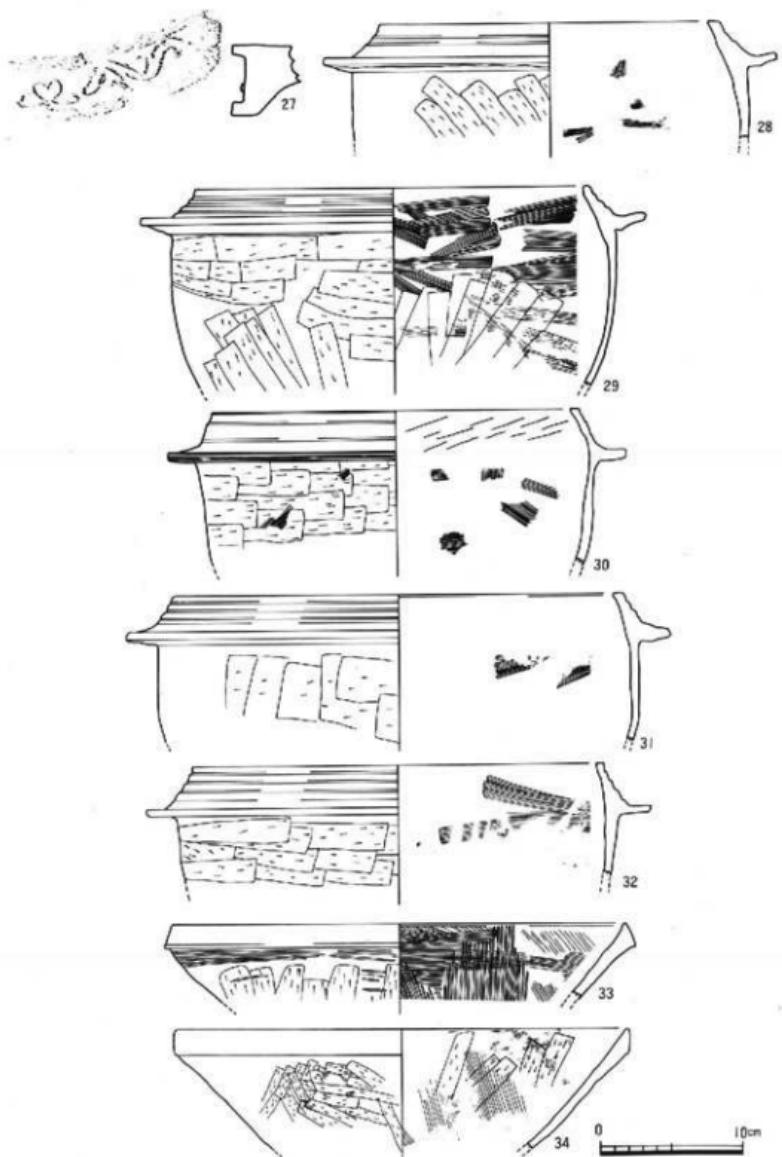
尚、上記調査の結果、記録保存が必要と判断されたものについては、(財)八尾市文化財調査研究会が学術発掘調査を実施しているが、事業者の理解により、計画変更や工法変更によって、かろうじて破壊からまぬがれた遺跡も少なくはないことをつけ加えておく。



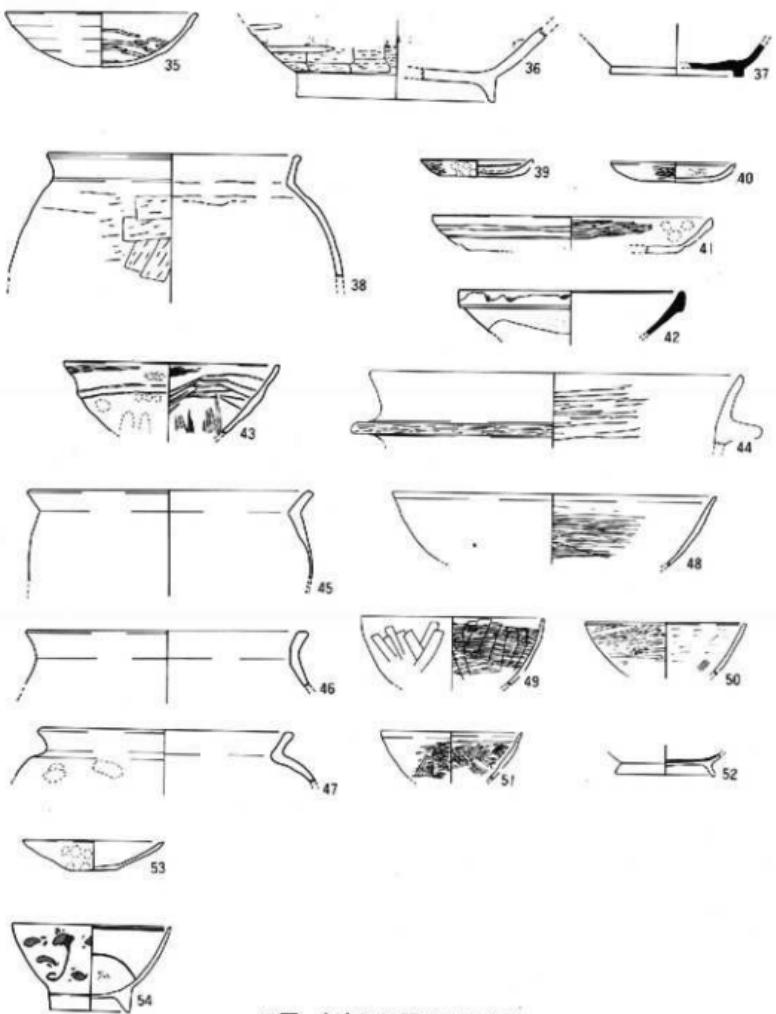
7図 市内発掘調査出土遺物



8図 市内発掘調査出土遺物



9図 市内発掘調査出土遺物



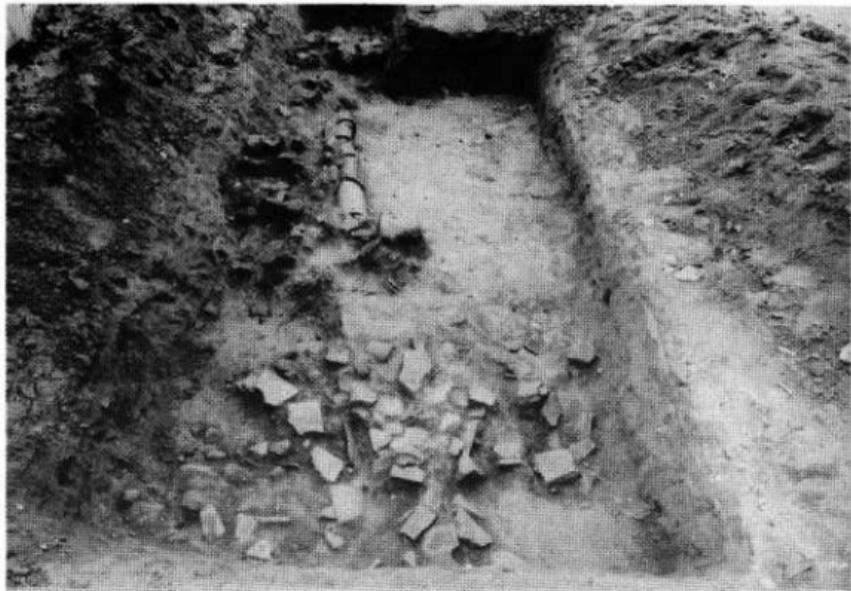
10図 市内発掘調査出土遺物



第3トレンチ全景



第3トレンチ断面



第4トレンチ全景



第4トレンチ瓦列遺構



第4 トレンチ下層遺構



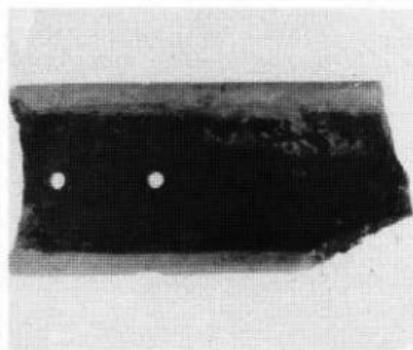
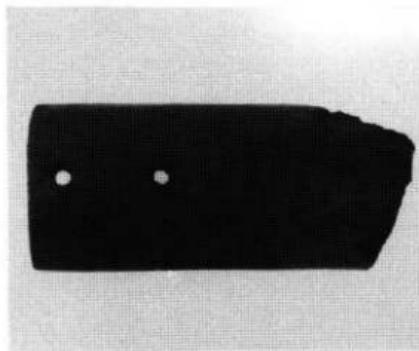
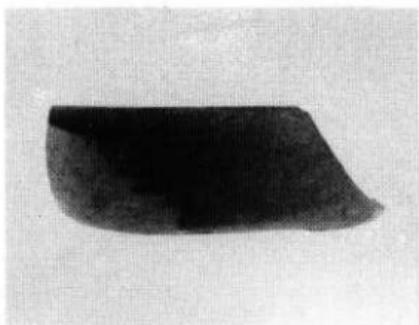
第4 トレンチ断面



第5 トレンチ断面



第6 トレンチ瓦溜め



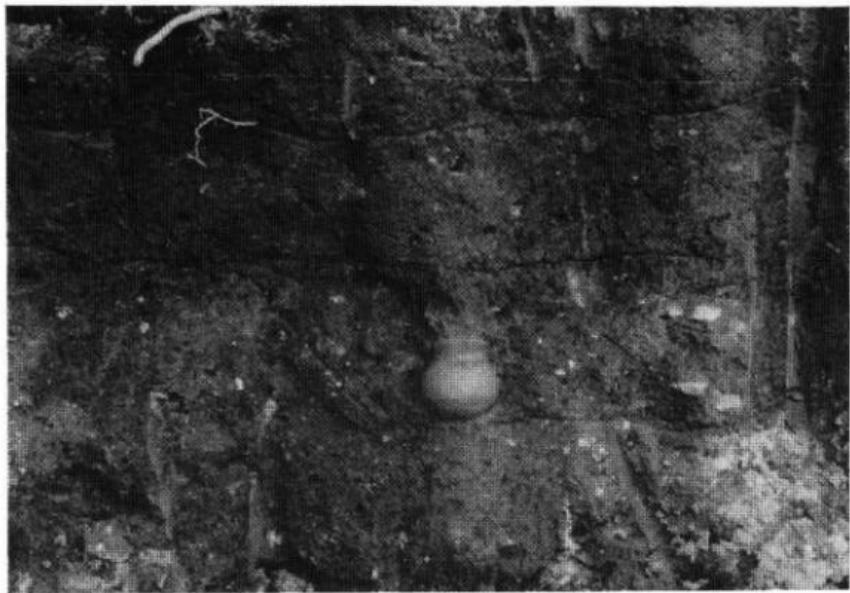
教興寺出土遺物



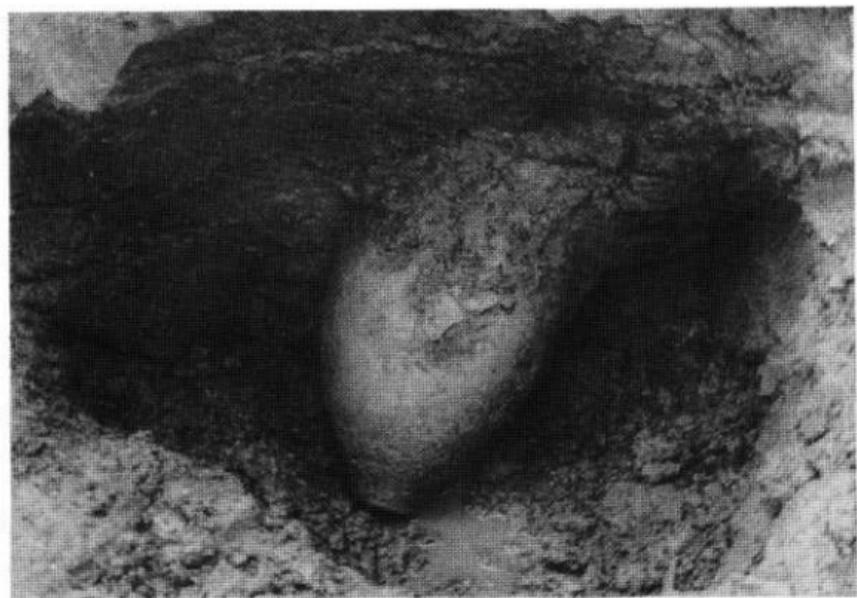
恩智中町 2 丁目275番地



亀井町 4 丁目34・43番地



壇内540番地



千塚169番地

